

# チャペルだより

第 209 号  
2023. 9. 15

後期主題 「お互いを尊重する」(ローマの信徒への手紙12章9 - 10節)  
“Respect One Another with Mutual Affection” (Romans 12:9-10)

主題聖句 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。

編集 広島女学院大学宗教委員会

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1 TEL (082) 228-0386  
http://www.hju.ac.jp/ E-mail:hjucac@gaines.hju.ac.jp

## 「お互いを尊重する」“Respect One Another with Mutual Affection”

ローマの信徒への手紙 12章9 - 10節 Romans 12:9-10

大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳

### もてなす

イランのタブリーズという大都市に向かうバスの中でのことです。目的地はトルコとの国境近くにあるマーカーという小さな町だったのですが、そこに行くためにはタブリーズのバスターミナルで乗り換える必要がありました。ペルシャ語はわからず、どうやってバスを乗り継いだらいいのか・・・そんな不安な気持ちでいたとき、近くに座った大学生と英語で話す機会がありました。そこで、ついわたしの不安を彼に語ったのです。すると彼は「心配なんてしないでいいですよ」と言うではありませんか。「なぜ？」と聞くと、「わたしが一緒についていきます」と言うのです。

広大なタブリーズのバスターミナルに到着すると、彼はマーカー行きチケットを売っているブースへわたしを連れて行って購入を手伝い、その後バスが発車する所へと連れていきました。そこにいる見ず知らずの乗客には、わたしがマーカーへ行きたいことも伝えてくれたのです。そして別れ際、「もし何か困ったことがあったら、いつでも電話してください」と彼の番号を書いたメモまで渡してくれました。彼とその後を引き継いでくれた親切な乗客のおかげで、わたしは心配することなくマーカーに辿り着くことができました。

「イランの人々は親切」と、バックパッカーの間では頻繁に語られます。わたしも数々の親切を受けながら旅をしていますが、タブリーズに数日滞在した時には、毎日夕方になると水たばこ屋へわたしを連れていき、紅茶をご馳走してくれるおじさんがいました。その彼にこんな質問をしたことがあります。「なぜイランの人は、見ず知らずの人に親切にしてくれるのか」。すると彼は「旅人をもてなすことがイスラムの務めであり、名誉でもあるのだ」と、水たばこの煙をくゆらせながら答えてくれました。

イスラム教の聖典の一つでもある創世記の18章2節には、アブラハムとサラが見ず知らずの旅人をもてなす話があります。実はその旅人は神とその使者達だったのですが、その伝統がイランには息づいているのかもしれません。あるいは、長い歴史の中でシルクロードを行き交う旅人たちは、新しい文化や知識を運んでくれる貴重な存在だったのかもしれませんが。あるいは紛争の絶えない中東では、相手を尊重して丁寧にもてなすことは、争いごとを避けるための処世術になっているのかもしれません。

「もてなす」ということは、相手に関心を示しその存在を尊重する態度です。その人々の心に触れた時、旅は深い出会いと気づきを創り出すきっかけを与えてくれます。この態

度は旅という限定された状況だけに留まらず、日常生活にも活かすことができるのではないのでしょうか。

### 他者も自分も大切に

2023年の後期主題聖句は「お互いを尊重する」を選びました。この言葉には「他者とその尊厳を認め、他者を大切に」と共に「自分に向き合い、自分を大切に」という二重の関係性が語られています。その前提には、自分を含めたすべての人に向けられる神の愛をパウロは想定しています。イエスは「自分を愛するように隣人を愛しなさい」と語りましたが、自尊心を持って自分を大切にすることで自分の価値を認めることは、他者に対しても相手の立場を尊重することに繋がっていきます。

それでは、他者とは誰でしょうか。家族をはじめ、身近な人や仲の良い友人に対して思いやりの気持ちを持つことは、それほど難しい事ではないかもしれませんが。しかし先に挙げたパウロの言葉は、自分の周りにいる人々との関係性だけではなく、むしろ見知らぬ人や関係性の薄い人との間柄を語るのです。

例えば、わたしたちが学校生活を営む上では、顔は知っているけれども話をしたことがない人とも日常的に出会っています。教室でたまたま同じ授業をとる人もいますし、食堂で隣のテーブルに座っているかもしれません。そのような他者に対して関心が向かわないのであれば、自分とのつながりも意識することはないでしょう。

他者に関心を持って気持ちを向けていくことは、親や仲の良い友人に対するのとは違って、自然と出来ることではないのかもしれませんが。ちょっとした自発的な努力があるのかもしれませんが。だからパウロはわざわざ「兄弟愛をもって互いに愛し」と語ることによって、身近な人に対して思いやるような気持ちを、他者にも広げることが大切だと説いているように思えてきます。

様々な知恵や珍しいものを運んでくる旅人と出会うように、あなたが関心に向けてくれると出会うその人は、ひょっとしたら、自分の視野を拓いてくれるような贈り物を持っているかもしれません。「尊敬をもって互いに相手を優れた者と思う」とは、自分の小さな世界観を広げて、大きな世界を見る視野を育む機会になるかもしれません。それと同時に、この関係性が作られる間柄ならば、自分も他者から受け入れられる安心感が得られます。自分の声や行動に目を向けると共に相手の立場を尊重する態度は、愛を重んじる生き方へとつながっていくのです。

# 秋季宗教強調週間

## 特別講演会講師

おの よし ひろ  
**大野 嘉宏** さん(在京都ラオス人民民主主義共和国名誉領事)

## プログラム

10月16日(月)から20日(金) は、秋季宗教強調週間です。

\*10月16日(月) 特別チャペル 12:30~12:50(ゲーンズチャペル)

大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生

\*10月17日(火) キリスト教の時間 13:00~13:45(砂本記念講堂)

「知らざる国ラオス その魅力と未来」 詩篇37篇4節~6節

在京都ラオス人民民主主義共和国名誉領事 大野 嘉宏 さん

\*10月18日(水) 特別講演会 13:00~14:30(砂本記念講堂)

「素晴らしい人生を送るために」 詩篇92篇1節~15節

在京都ラオス人民民主主義共和国名誉領事 大野 嘉宏 さん

★講師を囲む懇談会 15:00~16:00(ゲーンズチャペルロビー)

\*10月19日(木) 木曜日チャペル 12:30~12:50(ゲーンズチャペル)

「学生活動報告」G7サミットボランティア報告

生活デザイン学科4年 瀬戸 陽名 さん

◆学内献血 10月27日(金) 受付 12:30~16:30(ヒノハラホール前)



## 講師紹介

おの よし ひろ  
**大野 嘉宏** さん

在京都ラオス人民民主共和国名誉領事館 名誉領事 / 2023年度 日本国外務大臣表彰受賞  
 大野株式会社 会長 / OES株式会社 社長 / 株式会社 MIC 取締役  
 京都パレスワイズメンズクラブ チャーターメンバー / 京都洛中ロータリークラブ 元会長  
 趣味:音楽 男性コーラス バンド演奏(ギター キーボード ボーカル) 絵画 海外旅行

## わたしの歩みと学生へのメッセージ

1939年(昭和14年)京都市にて明治時代より続く和装染色の町工場の3男として生を受けました。

兄2人が大学卒業後、工場を継がず別の道に進んだため、父を助けるべく工業高校色染科を選び、大学進学を諦めました。

22歳の時、結婚を機に父の工場と別に会社を設立。これが現在の事業の礎となっています。

30歳の時に、YMCAの外郭団体である奉仕クラブ・ワイズメンズクラブと出会い、奉仕クラブ理論を中央大学元教授・小堀憲介先生に学びました。このころから「人生とは」との問題に関心を持ち、コロラド大学で心理学を教えておられた岩田静治先生から行動心理学を学び、その後の生き方に大きな影響を受けました。

そして2002年、日本キリスト教団上賀茂伝道所(現・京都上賀茂教会)で受洗いたしました。

国際奉仕クラブであるロータリークラブにも入会。クラブ会長を務めた年度に、ラオスに中学校の校舎を建てる事業をしたことがきっかけとなり、日本外務省の推薦で2010年にラオス外務省から名誉領事を任命されたことは、予想もしなかった出来事でした。

ラオス名誉領事になったことで、京都市長から京都市動物園にラオスの子象4頭を欲しいとの依頼をうけ、ワシントン条約で象の国家間移動が禁止されているなか、2014年に実現し、動物園の人気者になっています。

今回お話を頂戴し、皆様の知らないラオスという国の紹介と、今後ラオスで計画している事業について話をします。そして、私が影響を受けた言葉の一つ「人生は神の演劇、その主役は自分自身である」に基づき、一度しかない人生をどうやって有意義に楽しく生きるかのコツを、84年の人生で体験してきた事例からお話をしたいと思います。





## 蒔かれた種の芽吹く心を

人間生活学部 児童教育学科 教授 加藤 美帆

19世紀フランスの有名画家であるジャン＝フランソワ・ミレーの代表作のひとつに「種蒔く人」という絵画があります。種をまく農夫の力強い姿が印象的な1枚です。大学時代、聖書について学ぶ中で、「種を蒔く人のたとえ」にも触れることになりました。そして、この有名な絵画も、聖書箇所と関連付けて解釈されることがあると知り、それまでと少し見方が変わったのを覚えています。それは、キリスト教文化圏の芸術や文学をより深く味わうためには、聖書やキリスト教についての知識がベースとして不可欠であることを、ちょっとした感動をもって実感できた出来事でした。その後、大学院に進学して学ぶ中で、フレーベルの教育思想についてより深く理解したいと思った際にも、大学で学んだキリスト教的な考え方についての知識が役立ちました。

とはいえ、大学で聖書について学びはじめた当時はまだ、それがいつ役立つのか、どんなふうに役立つのか、深く考えたことはありませんでした。聖書の学びに限らず、学生時代のあらゆる学びは、専門的学びもそれ以外の学びも、今の自分が意味や価値を見出していることだけがその後の人生で生きてくるわけではありません。今の自分では、どんな意味があるのかまだわからないことや、あるいは、今は全く意味がないと思っているようなことが、思いもよらない形で役に立つことがあるのが、人生の不思議で面白いところだと私は思っています。

だからこそ、人生の先輩たちは皆、若者たちに、様々なことに挑戦できる学生時代の間に、自ら求

めて様々なことにチャレンジし、より多様な経験をしておくよう勧めるのでしょうか。より多くのことに取り組めば取り組むほど、失敗や苦い経験もまたすることになるかもしれません。しかし、それらはきっとその後の人生の糧となることでしょう。時には、その時の自分にはただただネガティブにしか感じられなかったような経験が、月日がたてば、ワインを熟成させるように意味合いが異なってくる場合さえあるかもしれません。

聖書の「種を蒔く人のたとえ」では、種が蒔かれる場所、すなわち受け取る側の心の重要性が説かれており、たとえ良きものが与えられても、甘言に惑わされたり、試練にあつてくじけてしまったりして根付かずに終わる場合があることが示されています。大学での学びを含め、私たちが日々経験する様々な出来事も、何らかの形で自分にとってプラスのものにしていくことができるかどうかは、受け取る私たちの心次第であり、経験を自分の糧としていくためには、途中しんどいプロセスを経なければならぬ場合もあると思います。しかし、若さあふれる学生の皆さんには、是非心を柔軟にして、ひとつひとつの経験に心を動かし、身体で感じて、今後につながるたくさんの良き芽を心に芽吹かせて欲しいなと思います。それを大切に育てていけば、いずれきっと、そこからたくさんの果実を収穫することになるでしょう。そして、私自身もまた、初心を忘れず、学生の皆さんと共に日々学び成長しながら、ひとりひとりの心の中に良き種が芽吹き、育つための助けとなれるよう努力していきたいと思っています。



## 学生エッセイ

## 平和をつくるために大切なこと

広島女学院大学 人間生活学部 児童教育学科3年

三原 奏子

私は広島市が主催する「旧陸軍被服支廠の活用を考えるワークショップ」に1年間参加していました。旧陸軍被服支廠という建物は国内最大級の煉瓦建築物である上に、被爆建物であることなどから、文化的にも歴史的にも価値があるとされています。ですが、その価値に対して知名度は高くなく、現状はその魅力が十分に伝わっていません。その状況を変えるためのワークショップに参加し、私は広島市民として意見を述べてきました。

ワークショップの活動をとおして、旧陸軍被服支廠の活用について参加者の方々の意見を聞いたり、自分で考えたりしたことをきっかけに平和活動自体に興味を持つようになり、積極的に参加するようになりました。今回はその経験をおして、私が平和について考えるうえで大切だと思ったことを3つ紹介します。

1つ目は、関心を持つということです。旧陸軍被服支廠は文化的価値と歴史的価値の両方があるにもかかわらず、過去には広島市が保有する3棟の内、2棟を解体する案が出されたことがありました。それは、多くの人に旧陸軍被服支廠の価値や必要性が伝わっていなかったからだと言えます。つまり、建物や歴史を存続させるには、まず私たちがそのものに関心を持ち、何のために残さなければいけないのか理解することが必要です。私たちが一人ひとり問題意識を持つことが、何かを守ったり伝えたりすることに繋がるのだと思いました。その一歩として、私は何事も自分で調べて関心を持つということを大切にしたいと思います。

2つ目は、人との繋がりです。私はワークショップやボランティア活動を通して色々な人に出会いました。そこで生まれたSNSグループが、ワークショップ終了後にはそれぞれが取り組んでいることを宣伝する場になり、新たなことに関心を持つきっかけとなりました。このように人との繋がりを持つと、自分が今まで知らなかった活動に興味を持ったり、相手の

活動を応援したりする機会ができます。私はこの交流が平和を考え続けるために大切なものだと思います。また、この輪自体が平和を広げているとも言えます。これからもこのような人との繋がりを築いて、平和について考え続けたいです。

3つ目は、自分にできることを実行することです。私は今まで、平和学習の中で自分にできることを考えるのが苦手でした。なぜなら、核兵器廃絶や世界平和という大きな目標に対して自分にできることは何も無いのではないかと考えていたからです。しかし、ワークショップやボランティア活動を通して、精力的に様々な企画や団体に関わっている人がたくさんいることを知り、個人でもできることは沢山あるのだと気づきました。例えば、企画や団体の立ち上げはできなくても、活動を広めたり手伝ったりすることはできます。そう思い、実際にボランティア団体のお手伝いをさせていただいた時、私は初めて自分にできることが見つけられたと思いました。大きなことはできなくても意外なところに「自分にできること」があります。それをやってみることが、間接的に核兵器廃絶などの大きな目標の達成に繋がっていくのではないのでしょうか。私と同じように自分にできることは無いと思っている方がいれば、小さなことでもいいのでぜひ足を踏み出してみたいと思います。



旧広島陸軍被服支廠

## 報告 8.6 平和学習プログラム オンライン版開催報告

8月5日(土)から8月6日(日)まで「2023年度第24回キリスト教主義大学ジョイント8.6 平和学習プログラム」をオンラインで開催いたしました。敬和学園大学、活水学院・活水女子大学、聖和短期大学、広島女学院大学の4校から学生・教職員あわせて20名の参加者でした。

5日(土)開会礼拝、続いて栗原貞子氏などの原爆文学研究者で本学卒業生でもある松本滋恵氏による被爆証言、講義として元本学大学宗教委員長・現名古屋学院大学准教授 澤村 雅史先生による歴史と多様な観点を通して考える「広島・広島・ひろしま・ヒロシマ」、元本学特任准教授・本学非常勤講師 西河内 靖泰先生による「原爆と差別～その構造を理解する」では、「原爆と差別」およびコロナ禍やハンセン病差別との共通性など、核兵器とその被害に関して多角的に学ぶ機会を得たことは大きな喜びでした。

6日(日)広島女学院平和祈念式典に参加し、参列者をはじめオンライン視聴者の皆様と共に平和の祈りを共にしました。その後、振り返りと意見交換を行いました。なお、事前学習のため広島平和記念公園での碑めぐり動画(2022年度撮影：案内人 澤村 雅史先生)を8月10日(木)まで公開しました。

お寄せくださった感想やご意見の中から次のとおりご紹介したいと思います。紙面の都合で全ての方の文章を掲載することがかなわなかったことをお詫びいたします。

### 敬和学園大学

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 4年生

石井 由希さん

まず、今年もこのような貴重な学びの機会を提供してくださってありがとうございました。今年で3度目の参加となりましたが、まだまだ学ぶべきことがあると実感したプログラムになりました。

大学2年生の時に敬和学園大学で平和学習サークルである「Keiwa Peace Project ～祈り・つながり・希望～」を立ち上げました。初めは、コロナ禍により様々な活動を制限された中での活動でしたが、それでもなんとかできることから少しずつ、活動を行ってきました。このサークルで1人ではなく、仲間と共に学ぶことの楽しさを知ることができました。サークルの存在を知っていただき、広島女学院大学さんからお声がけいただき、オンラインであっても誰かとつながることができる学びの機会が与えられたことに感謝しております。

今現在、大学4年生で、来年の春には卒業を控えてお



8.6 平和学習プログラム開会挨拶 栗津原 淳 先生

ります。教職の道に進む予定ですが、過去にあった出来事を伝え続ける活動は是非続けていきたいと考えております。広島女学院大学さんにいただいた貴重な学びの機会です。学んだことを忘れずに、これからも学び続ける姿勢を忘れずに過ごしていきたいです。

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 4年生

若月 美羽さん

澤村雅史先生の講義「広島・広島・ひろしま・ヒロシマ」では、原爆の熱線や爆風についてのお話が序盤にあり、その全貌を聞くと、私には到底想像ができず恐ろしくなります。また、詩人のアーサー・ピナードさんが、「原子爆弾というのは作った側の、兵器としての呼び方であり、ピカドンというのは被爆した方々の経験からできた言葉で生きた言語感覚で表現されている。言葉がどの視点から表現されているかを知ると実態を正確に掴むことができる」というお話が印象に残ったと同時に、非常に共感しました。一方だけの偏った見方を助長しているのは日本も同じで、教育では日本の間違いや過ちを学ぶということをしません。平和学の授業では、ドイツではか



講義：ヒロシマと平和①  
「広島・広島・ひろしま・ヒロシマ」澤村 雅史 先生

つて自国で起きたこと、起こしたことを子どもたちが学び、皆で考える時間がしっかりあると知りました。どんな被害があったのかを知ることはもちろんですが、日本が過去にどんな行動を起こしたのかを見て見ぬふりをせずに学ぶ必要があると考えました。西河内靖泰先生の講義『「原爆と差別」～その差別構造を理解する』では、ソーシャルディスタンスという言葉が穢れから一定の距離を保つという意味があることを初めて知り、無意識のうちに自らが差別を含んだ表現を用いていたことに情けなさを感じました。無知が恐怖を増長する、恐怖が差別を引き起こすというのはコロナで身に染みて感じたことで、誰も経験したことのないウイルスに怯えて、周りを疑っていた世の中の雰囲気でした。ネットに不確かな情報が出回り、目に見えた肯定の数が正義かのように語られます。その中で正しいことは何なのか沢山調べて、知って見極める力をつけなければいけないと思いました。今年で3回目の参加でしたが、新鮮な学びを得ることができ、またその学びを深めることができたプログラムでした。このような機会を設けていただき、ありがとうございました。

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 3年生

高橋 佳世さん

8.6 平和学習プログラムに参加したことは、私にとって平和について深く考える機会となりました。普段テレビ等では原爆のことなどを時々耳にしますが、直接学ぶ機会はありませんでした。しかし今回講義や被爆証言講話などをお聞きして、原爆や被爆した当時について学ぶことは、平和な世界を目指していくことや、人々が自分自身を見つめ直すことに繋がると感じました。過去の悲惨な出来事を風化させないためには、今を生きる私たちが積極的に学び、正しい知識を伝えることが必要なのだと思いました。今回学んだことは家族や友人など周りの人にも伝え、当時の出来事について考えるきっかけにしたいと思います。貴重なプログラムに参加させていただき、ありがとうございました。



被爆証言 松本 滋恵 さん

人文学部 国際文化学科 1年生

山口 のあさん

普段はあまり考えない戦争と平和について学ぶ良い機会となりました。また、このような貴重なお話をオンラインで視聴できたことを本当に感謝します。今回のお話から原爆の悲惨さが伝わり、改めて核は廃止するべきだと感じました。そして、これから私たちが何をしていくべきなのか考える機会となりました。幸い私は平和について考えるサークルに入っているため、そこで未来の平和について考えていきたいと思っています。

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 教授

川又 正之先生

今回もオンラインでの参加の機会を与您にいただきましてありがとうございました。関係の皆様のご尽力に感謝申し上げます。澤村先生の講義①「広島・広島・ひろしま・ヒロシマ」の中でご紹介のあった詩人栗原貞子さんの「ヒロシマというとき」の最後の部分「わたしたちはわたしたちの汚れた手をきよめねばならない」を目にしたとき、こころを引き裂かれるような思いがいたしました。日本はアジアで何をしたのか、に目を背けては平和学習を進めていくことはできないのだ、と実感しました。今回も、貴重な学びを得させていただくことができ感謝申し上げます。これからも、加害と被害の両面から、また、立場や考え方の違いを踏まえながら、平和と戦争の問題を学生たちとともに考え続けていきたいと思っています。

人文学部 国際文化学科 准教授

金 耿昊先生

私自身はヒロシマの出来事について、論文や著書、講演などの文献情報などを通して学んできましたが、現地を訪れたり、当事者の方のお話を聞いたりする経験はありませんでした。それだけに、まず今回はウェブ参加を通してであれ、原爆被害の問題を身に迫るものとして感じ、考えることができたことが何よりも大きな経験でした。



講義：ヒロシマと平和②「原爆と差別」西河内 靖泰 先生

その一方で、やはり、現場に身を置かなければわからないこともあると思います。私自身も広島におもむいて一緒に学びを重ねることができればと強く感じました。これからぜひ一緒に何かをできればと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。

## 広島女学院大学

人文学部 国際英語学科 1年生

### 本山 奈々実さん

私は島根県出身で、広島や長崎の原爆について学んだのは小学校6年の時以来でした。今回改めて原爆について様々なお話を聞くことができたのはとても有意義な事だと思いました。お話の中で原爆は人間だけではなく周りの動物や植物までも犠牲にしてしまったと知りました。私たち人間が何の罪もない生き物たちを犠牲にしてしまったことに悲しさを感じました。原爆は誰も幸せにしない、二度と使用されてはいけないものだとして改めて強く思いました。そして、世界が平和であり続けられるようこの場で学んだことを周りに伝えていこうと思いました。今回はこのような貴重な機会に参加させていただきありがとうございました。

人文学部 国際英語学科 1年生

### 徳野 七実さん

今回、8.6 平和学習プログラムに参加して得たものは「原爆の後の現実」です。松本さんは幼いころに原爆に遭い、焼け野原になった本川町を見た、とおっしゃっていました。私が幼いころとは反対の、酷い景色を見られていたのだととても心が痛みました。実際に体験したお話をオンラインではありますが、拝聴できたことにとっても貴重な体験ができたと思っています。また、広島女学院平和祈念式典に参加して献花し、祈りを捧げましたが、普通の平和学習ではできないことを体験することができて新鮮でした。その点も参加できて良かったと思います。



広島女学院平和祈念式典

人文学部 日本文化学科 1年生

### 猿田 愛果さん

8.6 平和学習プログラムに参加して、改めて平和について考えることができました。広島に住んで平和学習を受けていても知らないことがまだあることに驚き、もっと勉強しようと思いました。意見交換では自分の意見を話して交流することに苦手意識があり、とても緊張していましたが、自分の考えたことや気持ちを伝えることができ、とても良い経験になりました。これからも広島に住む学生として平和学習に積極的に参加していきたいと思っています。

人文学部 日本文化学科 1年生

### 寺田 弥布さん

高校でも、「灯籠流しは、亡くなった人々の魂一つひとつの追悼である。灯籠流しをただ綺麗という言葉で終わらせることは出来ない。」というお話や、学徒動員の建物疎開作業で亡くなった生徒の話は聞いていたが、6300人もの生徒が亡くなっていることは知らなかった。西蓮寺というお寺には音楽法要のためパイプオルガンがあるということにも驚いた。35トンもの風圧を受けた建物や人がどうなるのか、考えるだけでもひとたまりもないと思った。日本は被害の面がとても強い印象があるが、加害の面も忘れてはいけないと思う。引き取り手がいない遺骨が今でもあることに被害の大きさを感じた。太陽と同じくらいの温度の熱線を瞬間的とはいえ人や建物が浴びたと考えると、骨すら残らないのではないかと恐ろしくなった。また、入市被爆という言葉を知った。私たちは、原爆の悲惨さを知っているが、日本が犯した戦争の過ちはあまり知らないのではないかと考えた。自分で調べて、戦争の歴史を知るべきである。それが原爆や戦争を知らない、現代を生きる私たちにはできることだと考えた。

司書課程 非常勤講師

### 高野 淳先生

講義「原爆と差別」については、自分が広島に住んでいると気がつかないことが多く、参考になりました。被爆体験についてどのように伝承していけばいいのかわからないところがあります。自分の経験で言えば、原爆について、被爆者である父からよりも、被爆者ではない母から聞いていることのほうが多い気がします。そのようなことも、被爆体験の伝承の難しさではないかと思っています。

## 2023年度 後期チャペル表（9月～2024年1月）

後期主題：「お互いを尊重する」（ローマの信徒への手紙12章9 - 10節）

“Respect One Another with Mutual Affection(Romans 12:9-10)

月	日	火曜日「キリスト教の時間」 13:00～13:45 砂本記念講堂	司会	木曜日チャペル 12:30～12:50 ゲーンズチャペル	
9	26	「賛美歌を歌おう」 ★聖歌隊 賛美歌のお話と歌唱指導 広島女学院大学オルガニスト、広島女学院同窓生、 日本キリスト教団讃美歌委員 玉理 照子 先生	前田	28 管理栄養学科 溝口 嘉範 先生	
	3	創立記念礼拝(137周年) 「わかってわからないキリスト教」コリントの信徒への手紙一3章9節 院長・学長 三谷 高康 先生 ☆ゲーンズ学術奨励賞授与式	栗津原	5 児童教育学科 学生生活活動報告	
	10	主題解説「お互いを尊重する」ローマの信徒への手紙12章9 - 10節 大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生	栗津原	12 生活デザイン学科実習助手 山下 遼 さん	
	10	16 (月)	特別チャペル 12:30～12:50 (ゲーンズチャペル) 大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生		
		17 (火)	キリスト教の時間 13:00～13:45 (砂本記念講堂) 「知らせざる国ラオス その魅力と未来」詩篇37篇4節～6節 講師 大野 嘉宏 さん (在京都ラオス人民民主主義共和国名誉領事) 司会：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生		
		18 (水)	特別講演会 13:00～14:30 (砂本記念講堂) ★聖歌隊 「素晴らしい人生を送るために」詩篇92篇1節～15節 講師 大野 嘉宏 さん (在京都ラオス人民民主主義共和国名誉領事) 司会：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生 ★講師を囲む懇談会 15:00～16:00 (ゲーンズチャペルロビー)		
		19 (木)	木曜日チャペル 12:30～12:50 (ゲーンズチャペル) 生活デザイン学科4年 瀬戸 陽名 さん (学生生活活動報告)		10月27日(金) ◆学内献血 12:30～16:30 ヒノハラホール前
	24	トランスジェンダーに関するお話 森 なお 牧師 (日本キリスト教団加古川東教会)	福田	26 学生生活活動報告 国際英語学科4年 村上 真菜香 さん	
	31	清胤 弘英 先生 (浄土真宗本願寺派 正覚寺住職・本願寺派布教使)	小松		
	11				2 学生生活活動報告 チャペル委員劇プロジェクト
7		本学院同窓生からのメッセージ 「社会(世界)に出て気がついた広島女学院の魅力」(ピアノ演奏と共に) 島田 久美さん (ピアニスト)	中山	9 生活デザイン学科学生生活活動 韓国FW報告	
14		東区連携健康講座 「たばこの害(副流煙の害も含む)、肺がんについて」 すみよし内科クリニック 院長 住吉 秀隆 先生	石長	16 管理栄養学科 学生生活活動報告	
21		NPO 法人カンボジアひろしまハウス協会	小松		
28		中嶋 浩郎 先生 (翻訳家・元フィレンツェ大学講師)	福田	30 児童教育学科 細 恵子 先生	
12	5	広島女学院大学人権週間 「公害と人権(仮)」 西村 仁志 先生(広島修道大学人間環境学部 教授)	石長	7 院長・学長 三谷 高康 先生	
	12	ミカエル金起煥(キム・キファン)神父(カトリック福山教会主任神父)	前田	14 日本文化学科 山口 大輔 先生	
	19	クリスマス音楽礼拝 演奏：弦楽四重奏 A.O. カルテット ショートメッセージ：大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生 献金ほか	栗津原	21 クリスマスコンサート 学生オルガニストによる パイプオルガン演奏	
1	9	本学院同窓生からのメッセージ 山下 育美 先生 (動物愛護 NPO 法人 SPICA 代表・進徳女子高校英語教諭)	中山	11 学生生活活動報告 国際英語学科2年 古川 采音 さん	
	16	「学生生活を振り返って」卒業学年生による感話 国際英語学科 柴田 莉子さん、日本文化学科 上野 優希菜さん、 生活デザイン学科 河野 明理 さん	学生	18 人事・会計課 清尾 奈津美 さん	
	23	大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳 先生	栗津原	25 学生生活活動報告 国際英語学科3年 矢加部 叶子 さん	

※ 「キリスト教の時間」 オルガニスト：玉理 照子先生(大学オルガニスト)